

知識基盤社会のリテラシーを育成する 連携型高校の授業革命への挑戦

— 神奈川・県立 光陵高校 —

2013年度から完全実施される学習指導要領の改訂に伴い、「思考力・判断力・表現力等の育成」を重視する教育実践を行っている光陵高校。知識基盤社会のリテラシーを育成するために、従来型授業をどのように改革していったのか。5年間の軌跡を紹介したい。

取材・文／永井ミカ

● 実践のKeyword

中高大連携

総合学習

言語活動

課題研究

授業改革

グループワークを中心に 言語活動を生かした授業実践

1年生の国語総合の授業。小説「必殺アミタワシ」という題材の中に何度も出てくる「ゴシゴシ」という表現について、その意図や効果を4人1組のグループで話し合う。「女性軽視の象徴？」「主人公のイライラを表している？」それともただの場面転換？…ワークシートに自分の考えを書きこみながら意見を出し合い、小さなホワイトボードにメンバーの意見を集約していく。そして、各グループがそれぞれの考えを発表。その後、グループのメンバーをシャッフルし、お互いが質問しあったり新たな意見を交わしあう。教員は、グループAのメンバーを、対照的な意見を出したグループBに送り込み、議論を戦わせる場を作り出す。こうして何度かグループを替わることで、また違った人の意見を聞き、話し合い、自分の考えを深めていくのだ。

そのころ、体育の授業では剣道のグループワークが行われていた。竹刀で新聞紙を切らせるが、すぐに切れる生徒もなかなか切ることができない生徒もいる。それは技術の問題か、心の問題か。できない原因を話し合い、教えあいながら、最後はグループ全員がチャレンジを成功させた。そして、美術室では各自が、将来住みたい家の模型を制作。2人1組で設計意図などをインタビューし合い、最後に自分の家ではなく、相手の家について、評価も交え発表する。

ほかに、社会、理科、数学、英語の全9科

目で実施された研究発表会での研究授業。こうした発表会は4回となり、今年度のテーマは「言語活動をいかした思考力・判断力・表現力等の育成」だ。テーマは毎年進化するが、リテラシーの育成という根底のテーマは変わらない。「リテラシーとは、これからの社会をよりよく生きるための幅広い能力。そして、知識を習得するだけでなく、将来にわたって活用ができる力。それを生徒につけさせるためには、全教科、学校全体で発表会に取り組み、教員に力をつける必要があります」というのは、校長の鈴木俊裕先生。研究授業の発表者も毎年代え、4年間でほぼ全教員が発表を経験した。こうすることで、授業改革が全校で取り組むべきこととして浸透し、教員のスキルアップを図れる。こういった授業のスタイルは研究会の時だけのものではなく、普段から実践されているのであろうということが、活発に意見交換する生徒の様子からみとれた。

リテラシーの育成を重視した 3つの取り組み

始まりは2007年12月。光陵高校は神奈川県立教育センターより指定を受け、「中・高・大連携により、これからの社会をよりよく生きるための幅広い能力（リテラシー）の育成を重視した教育展開を進めるための『かながわの中等教育の先進的モデル』づくりを推進」することになった。リテラシー育成を柱に中高6年間を見通し



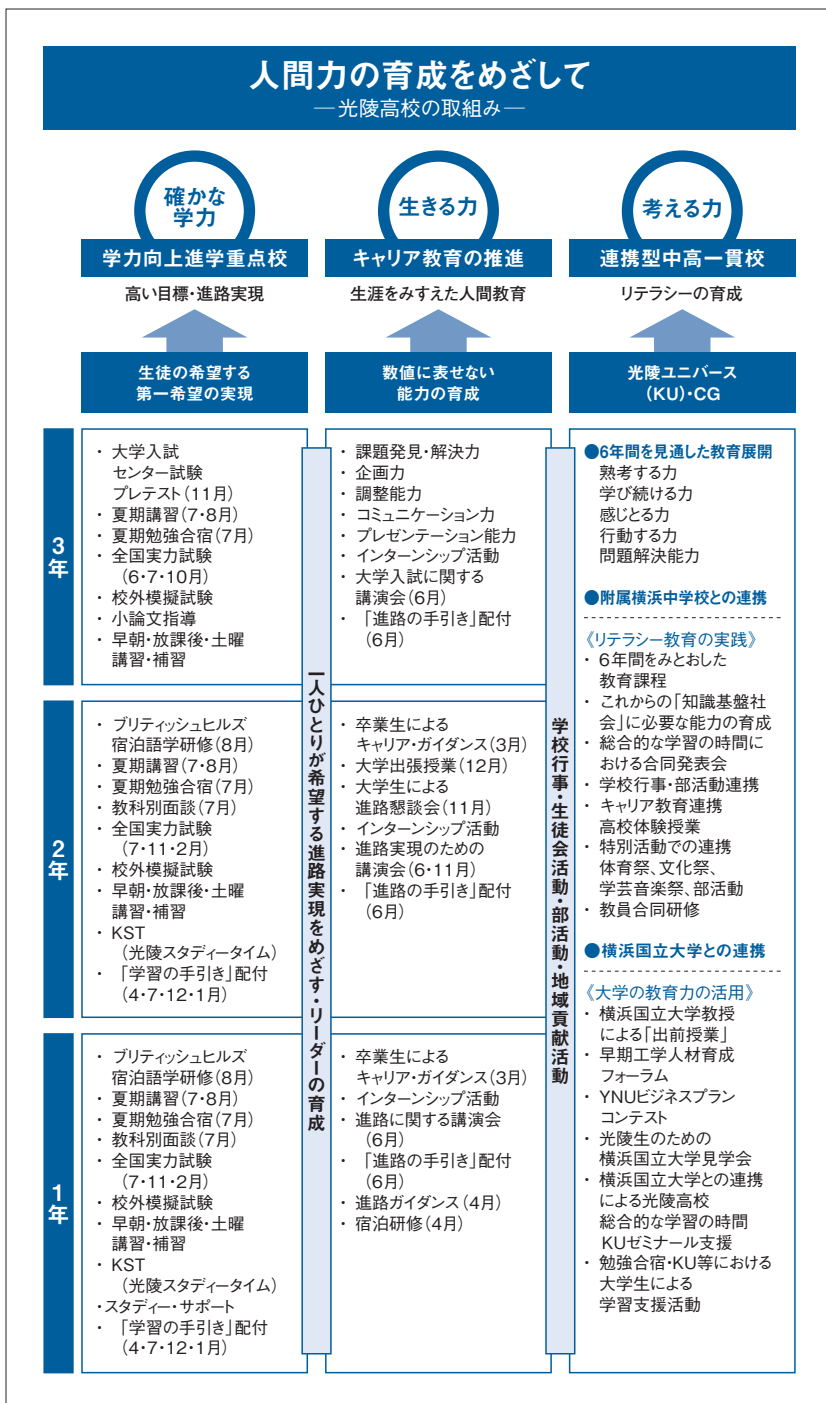
School Data

普通科 / 1966年創立
 生徒数 / 生徒数713人(男子370人・女子343人)
 進路状況(2010年度実績) / 大学71.1%・短大0%・
 専門学校等0%・就職0%・その他28.9%
 神奈川県横浜市保土ヶ谷区権太坂1-7-1
 TEL 045-712-5548
 URL http://www.koryu-h.pen.kanagawa.ed.jp/

Outline

横浜国立大学教育人間科学部附属横浜中学校と連携型中高一貫校として教育展開を実施。また、横浜国立大学と連携して先進的な授業実践研究に取り組むなど、「かながわの中等教育の先進的モデル」作りを進めている。2007年度からは学力向上進学重点校の指定を受け、さまざまな形での補習や90分授業などを導入。ゼミ形式による課題研究などキャリア教育にも力を入れ、これからの知識基盤社会に必要とされるリテラシーの育成を図っている。

図1 光陵高校のグランドデザイン



た系統的な教育展開を横浜国立大学教育人間科学部附属横浜中学校(以下、附属中学校)と連携して行い、「連携型中高一貫校」を作っていく。また、そのためには横浜国立大学とも協力しあうことになってきた。

一方で同じ07年度から学力向上進学重点校にも選ばれており、90分授業の導入(現在は90分と45分の併用)や各種補習の充実などにも取り組んでいたのである。

08年度に鈴木校長が着任。鈴木校長は、海外の高校の進んだキャリア教育事例

に触れた経験から、日本の高校でももっと当たり前のようになりキャリア教育に取り組むべきと考えていた。県が推進するリテラシー教育と、キャリア教育、そして進学校としての進路実現、この3つを柱に同校のグランドデザイン「人間力の育成をめざして」(図1)は完成した。

具体的にはまず、「KU(光陵ユニバース)」に着手。総合的な時間を行うプログラムであり、主に①研究と発表、②進路・キャリアのテーマで構成されている。

①は、自ら課題を発見し、その解決に向

けて研究し、自分の考えをわかりやすく表現することを目的としたゼミ形式の探究活動。入学後すぐ各生徒がテーマを決め、その内容により教育人間ゼミ、環境生命ゼミなどのグループに分かれて研究を行う。1年生ではその研究をさらに発展させ、2年生ではその研究をさらに発展させる。2学期に論文にまとめる。この研究の過程では横浜国立大学の協力も仰ぎ、最終的には教育関係者などの外部も招いて、大規模な成果発表会「エンハーベスト発表会」を附属中学校や同大学、同附属小



毎年秋に行われる研究発表会。200人前後が訪れる大規模なもので、1、2年生の全教科で研究授業の発表も行われる。写真は各授業後の教科別研究協議での意見交換の様子。



左/国語総合。言語活動を生かす授業ではグループワークが中心だが、グループをシャッフルするなど、一歩進んだ取り組みを実践している。右/体育(剣道)。気づいたことなどをワークシートに取り組むのは、体育の授業でも同じ。振り返り、自分の成長を確認する。

学校と共同で行う。

②は「大学生による進路懇談会」「大学出張授業」「卒業生によるキャリアガイダンス」など進路にかかわるガイダンスが中心で、そのほとんどが論文発表後の2年生後半以降に行われる。

他校の例に比べ、光陵高校の探究活動は時期が早い。その理由について「何も将来の見通しが立っていない状態で、一度ゆっくり自分の興味関心について考えてみてほしい。そういう経験が将来(キャリア)を考えることにつながり、何のために勉強をするのかを考えることにつながるのだと思います」と、総括教諭の遠藤隆一先生は言う。

連携型のメリットを生かしながら全教員が授業改革に挑戦

KUの次は授業改革である。リテラシー育成を見据えた授業改革については、まず県立総合教育センターと定めたりテラシー育成のために必要と思われる5つの力に基づいて、中学から高校での教科活動で何ができるかを整理した(図2)。鈴木校長は着任後、すぐに全教員と計4回ずつの個人面談を実施。また全教員の授業も見学し、マンツーマンで改善点を話し合った。そして、2008年度から毎年秋に、冒頭で紹介した授業改善に関する研究会を大規模に開催。この開催準備が教員の研修・研鑽を兼ねることで全校的な授業改善に大きな役割を果たす。4月から職員研修会やテーマ検討を経て、全体研究テ

マや教科テーマを決定。教員相互の授業参観や校内職員研修会、附属中学校との合同研修会などをそれぞれ2〜3回実施。授業発表者は原則として発表未経験の教員から選び、ブレ研究授業・研究協議会なども開催。これらの準備には、県立総合教育センターや県立体育センターとの協議も加わる。そして、研究会当日は、発表発表のあと、他校から参加した先生方との教科別研究協議や総括講評があり、文部科学省、県教育委員会、横浜国立大学などからの指導や助言を受ける。

なお、光陵高校からは教員一人が2年間ずつ附属中学校に向向。附属中学校からも研究会開催に向けての教員の派遣などがあり、情報交換しながら中高連携の授業作りを進めている。中高大連携が教員間でも行われているのは大きな特徴だ。

研究発表会でも使用された指導案(図3)は附属中学校のフォーマットを活用。一般的な指導案はタイムラインに沿った授業展開が書かれているが、このフォーマットは違う。「まず先につけたい力があり、そのためにどんな活動を行うかを書く形です。どんな活動でも、まず先につけたい力を意識して行うのが本校のやり方です」と、図3の指導案を作った総括教諭の山田秀二先生。1コマの授業ではなく単元でとらえ、その中で目的、つけたい力、理解してもらいたい内容などを意識しながら展開する授業。根底には、授業は「生き物」であり、予定どおりに進むとは限らないという発想があるため、細かい授業展開例は必要としな

図2 6年間を見通したリテラシーの育成と5つの力

	中学校 《発見し、探求する》	高校 《充実し、発展する》
問題解決力 自ら課題を見出し、問題に対して解決を図る	自分なりに課題を発見/自ら課題を解決していく態度と能力の開発	多様な課題に対し主体的に課題や問題点を解決していく意欲と能力の育成 (学習活動例)個人の健康維持や集団の健康を改善していくために身近な問題を取り上げ、ディベート形式や発表形式で深く意見交換をすることにより、適切な行動を選択し生活環境を改善していく意欲と課題解決能力を高める。1年(保健体育・保健)
学び続ける力 教育活動を支える「科学」「数学」「言語」と自らのかわりをとらえる	学ぶ喜びを体験することによる生涯にわたって学んでいくこととする態度の育成	基礎基本の充実と発展/自己の将来像の実現に向けた主体的な学習態度の育成 (学習活動例)タンパク質合成のしくみや遺伝子調節のしくみ等について理解し、最新の知見を自ら調べることにより、自然の事物や現象に対して、科学的・合理的に探究する力を高める。3年(理科・生物II)
感じとる力 他者への思いやりをもち、芸術や文化に親しみ、感動する心をつくる	コミュニケーション活動の重視により、互いに問題を共有しあい、共に生きていくことの重要性を感じる態度の育成	生きていく上での他者とのさまざまなかわりの理解/他者の望ましい共生をめざす力を育成 (学習活動例)書道作品や音楽演奏とのコラボレーション発表などにより他者と共により上げる幅広い芸術体験により、表現を追求する喜びを深く味わう力を高める。1年(芸術・美術I)
行動する力 主体的に社会に参画し、自らを一層成長させながら、社会に貢献する	自己理解のための活動の重視/社会生活とのかかわりの中で、自分の生き方を考える力を育成	社会的な活動への意欲の育成/自ら考え判断し、主体的に行動できる資質を育成 (学習活動例)国際紛争に関する課題レポート作成やそれに基づく意見交換を繰り返し、自らの考えや研究成果をHP等に発表する活動を通して、民主的で平和的な国家・社会を構築・維持するため、自らの知識や経験を踏まえた意見を発信する力を高める。3年(地理歴史・世界史B)
熟考する力 自己をとりまく「もの・こと」を理解し、それを活用する	文章や図表、現象などを理解・評価しながら捉える力や、自分の考えをまとめる力を育成	目的や課題に応じて、事象を理解・解釈し、自分の知識や経験を踏まえた意見を表現する力を育成 (学習活動例)日用品のデザイン等について、形態や機能性、経済性など、ディベート学習を視野に入れた多様な情報を収集する活動を通して、自分を取り巻く社会の情報を多面的・批判的に理解・解釈し、適切に表現する力を高める。1年(情報・情報A)

※中学校の学習活動例は省略

いのだ。「生徒にも常に、この授業でどんな力がつくのかを意識させています」と山田先生が言うとおり、研究授業後には、自分たちに考える力や伝える力がついていることが彼ら自身の口から語られていた。

板書で教えて暗記させる従来の講義型授業から、考えさせ発表させる授業への大きな転換。遠藤先生も、そういった授業を担当の数学でいったいどうやって行えばいいのか、最初はとまどったと言った。「けれども



総括教諭
山田秀二先生



総括教諭
遠藤隆一先生



校長
鈴木俊裕先生

図3 指導事例(1年・国語総合)

ダウンロード可

1.日時:(略) 2.学級:(略) 3.科目名:国語総合

4.本単元で身に付けたい力

文章の構成や展開を確かめ、内容や表現の仕方について評価したり、書き手の意図をとらえたりしようとする力[「C読むこと」(1)のEに基づく]

5.本単元の評価規準

関心・意欲・態度	読む能力	知識・理解
①文章の内容や表現の仕方を評価しながら読み、書き手の意図をふまえて、作品世界に関する自分の考えを深めようとしている。	②文章の構成や展開を確かめ、作品における語句の効果的な使い方等、表現の工夫について書き手の意図と関連付けつつ、評価しながら読んでいる。	③文章の理解に役立てるための表記、語句、語彙、漢字等の意味や用法について理解し、知識を身に付けている。

6.単元・教材について

(1)単元・教材名

・単元名:小説

・教材名:「必殺アミタワシ」(干刈あがた)(『展開 国語総合改訂版』桐原書店より)

(2)本単元・教材における思考力・判断力・表現力等を育成する指導

・本教材は、高校生である主人公の視線を通して家族の関係をリアルに描き出した小説である。劇場的な語りかけの文体や、文章の所々に挟まる「ゴソゴソ」という擬声語が特徴的であり、なぜ書き手がこのような文体や表現を用いたのかを考えさせることで、作品の主題に迫ることができ、単元の目標にふさわしい教材であるといえる。

・少人数のグループによる話し合いにより、様々な視点からの読解をふまえ個々の思考を深めさせ、話し合った内容をグループで一つにまとめ上げ、協力して発表させる。という過程の中で、思考力・判断力・表現力等の育成を図りたい。

7.能力育成のプロセス(8時間扱い)

次	時	評価規準 ※()内はAの状況を実現していると判断する際のキーワードや具体的な姿の例	【 】内は評価方法及びCの生徒への手立て	主たる学習活動 ※主に思考力・判断力・表現力等の育成に関わる活動に下線	指導上の留意点・ポイント
1	1	(略)	(略)	(略)	(略)
2	2-5	(略)	(略)	(略)	(略)
3	6-7	②作品中の特徴的な表現について、その表現意図や効果を評価しながら読み、自分の考えをまとめている。 (②は評価規準の番号) (A:文中の語句に注目し、その表現意図や効果について、グループやクラス全体の話し合いを通じて自分の考えを深めている。) (B:これまでの学習活動で習得した知識や理解を活用し、また他者の意見を参考にして、自分の考えを深めている。)	【行動の観察】【記述の分析】 C:「ゴソゴソ」という擬声語が、展開によって変化していることに気付かせ、なぜそのような変化が生じるのかを考えさせて、話し合いに参加するよう促す。 C:これまでの学習活動を再確認させ、他者の意見を聞いて自分の意見がどのように変わったのかを意識させて、ワークシートに書くよう促す。	・ワークシートの記述を活かしつつ、話し合い、まとめ、発表する。 ・各グループの発表後に発表内容について全体で議論する。	・グループは原則4人一組とし、司会1人、発表者1人、質問者2人を決めさせる。 ・ホワイトボードは、黒板に10枚を比較できるように配置する。 ・聞く生徒に質問メモシートを記入させる。
4	8	(略)	(略)	(略)	(略)

8.本単元における思考力・判断力・表現力等を育成する学習活動

【思考力・判断力・表現力等が育成されている姿】

・少人数のグループによる話し合いに積極的に参加し、様々な視点からの読解を踏まえ自分の思考を深めようとしている姿。(思考力)
(以下略)

【活用する学習場面や言語活動の具体】

・登場人物の関係をワークシートに図式化しお互いに説明する。(要約・説明)
(以下略)

【習得している基礎的・基本的な知識及び技能】

・語句の意味や用法について理解している。
・作品の情景や心情の推移など文章の展開を的確にとらえている。(以下略)

9.この単元の授業を行う際のポイント

・一般的に小説の読解は、「文章に描かれた人物、情景、心情などを表現に即して読み味わうこと」が中心となる。もちろん、この授業を行う際においても、この指導事項について意識し、登場人物のもの見方、感じ方、生き方等について読み取らせることを指導する必要があるが、今回の授業における指導では、「文章の構成や展開を確かめ、内容や表現の仕方について評価したり、書き手の意図をとらえたりする」という指導事項とその系統性を踏まえることがポイントである。
(以下略)

実践しているうちにわかってきました。解き方について生徒に考えさせ、話し合わせるためには、教員の話す時間を徐々に減らし、生徒が発言できるようにしむけていきます。今は小中学校でこうした授業が進んでいるため、最初からまったく話せない生徒はいません。それでも参加しない生徒には、内容が理解できない、大勢の前で話すのは苦手など必ず理由があるので、声かけしながら理由を考えるようにしています」

それは山田先生も同じ。「最初、教員がファシリテーターの役目をします。けれど、光陵高校の改革が始まってからおよそ5年。「何人かのエキスパートの教員がいても意味がない」という鈴木校長の信念のもと、全員の先生が授業改革を行うことを目標に突き進んできた。想定していたのに近いキャリア教育の形もできた。光陵高校

は、多くの学校から視察を受けるなど、神奈川県の中でも最も注目される学校のひとつとなったのである。

「推進校として選ばれ、連携型中高貫校となった。こういった外からの支援のタイミンが、一人ひとりの教員の努力など、いろいろな要素が重なったおかげです」と言う鈴木校長。「廊下で会っただけでも、さまざまな意見を私にぶつけてくる生徒たちにも成長を感じます。ただ、社会に対する高い志をもち、さらに自主性をつけてもらうにはどうすればよいか、という大きな課

題もあります」

2012年度より、推薦枠での附属中学校からの新入生受け入れ(最大40人)が始まる。同附属横浜小学校も参加し、小学校から大学まで16年間の系統的な教育活動も動き出す。また、県教育委員会の新しい提案制度に応募し、キャリアアカウンセリングによる支援体制を確立したキャリア教育モデルを改めて目指していくことにもなった。このことが光陵高校の今後の活動にどんな刺激をもたらすことになるのか、新たな期待が高まっている。